稱
壽
花鳥巻

863
101

国立国会図書館　タイトル『花鳥巻』 請求記号 863-101

ガラス使用

863-101

叙

和露文庫

国立国会図書館　タイトル『花鳥巻』　請求記号 863-101　　ガラス使用

来呈篇章堆案府下殊務志埭士竜廉間
風吹三子相謀將付剞劂以始後策因請
序於余〻曰凡人之得壽老衆矣生業益
于人毫無傳于後徒以長年而眠〻焉止
老矣足以稱壽哉若夫材之美顯然邁於
衆人而馳譽以講舉聲百里是壽之可以

為榮者也於是乎為龜齡為鶴算為彭祖
偓佺亦不以為誣也余与翁相識二十餘
年矣然性拙且懶雖不足以榮翁壽而喜
其材之美傳于後世而不蕪沒遂弁數言
于巻端云乃作葬鶴之歌曰
鶴飛下兮姚山巓雪羽翩〻聲豁然蘭汀

茫砌淺如雲ノ新晴風對舞玉觴ノ前中ニ及ニ七旬
矍鑠(タル)菊乘ニ之歌遣(下)訊(中)崆峒(ヲ)(上)更不(ヤ)見南陽甘
菊水和与歌啄(メ)壽無窮
寶曆六年丙子初夏浪華逸民樗菊撰

賀筵俳諧之百韻　桐笑翁

うゝれを茫々ゆゑ御代乃春　寒瓜

着初の伊達を矩こへぬ色　能移

又霧山飛り去る時ゆ日ホ　士龍

かゝみ極淺水のうゝしさ　鳳吹

荷車の使を窓に待更て　寒秀

不こりそのまゝ如り物のうへ　帰厚

胡あらしさら雲はしる月の弓　史幸

聲を放されて霧くる牛　鶴羽

いとゆふに縫ひし簑も秋の旅　師龍
仕形を所しに扇子入ル山　梅流
めてとき越牡丹の昔居和　寒桃
歌ハ意ふを兼用松風　艮騅
浮世縛ハ何を心に胡ひと　里夕
子鳥妙沙渚なるて鳴里　魚貫
西りを宿せし歌ハ家ありて　羅仗
如き掛く墨摺ハよきに　左隣
樹ハとれり樹の花さきふ月の代　志芸

いさ海しきが磬を撃とも　集山
ひふ出るハ却しの濃藻を聞ひ　羊化
津なきし魚乃ろ鶴も賣のか　竹尾
氏宮の梅を三ツ四ツ咲かり　素々
てりしのとか船の綿衣　寒泉
形に似ぬ鶴の聲を踈きれ　胡文
何を覚えて御立乃筆　踈柳
鬣簗ハ秩に有て人志らぬ　寒考
蛍の何かり却ひかれなき　去遑

備ゆらハ爲ハ沢山 木辻 道 文坡
葉ともアてさる葉さへ 晩 嶋仙
寒ぬに 逢ぬ雪の待ぬる 専佐
寐てもしらぬ神樂歌 梅四
十圓子家に出来ても 宇津の山 等柯
捕つてこまるわるさしる猫 呈考
生索の屋をおりと煙るこし 桐圭
世を琵琶法師歌を詠ふ 寒秀
月の出に田乃方角知てくれ 能移

笠になるへき草 新葉の幅 士龍
八朔をきき踊のおしこ 靜 鳳吹
まてみりしまる風乃羅 寒仙
待千待て花ゆく 釋花ゆく 歸厚
比丘尼のさしハヒンサヽラのこ 史幸
降ぬりを 神五月雨のぬきん 鶴羽
まし散志まに南天新芸 師龍
文張と成て 鶴見る常新石 梅流
熨斗目の掛をまり 蔵る孫 羊化

有明の鐘り手水に汲分て　魚貫
秋にも黒金鉄梯ら山鉄　寒桃
帯深く追く私の包まれて　良雖
祢こゝろ祖に　よき作の様　里夕
とく知らく毎にも明るの苦のなす　尤隣
龍と成機の差こそ　羅仗
燕は巣かゝ子の糞たゝひ捨　集山
青磁乃物は水打ぬ笞　志芸
雨風と竹吹方に見えて　竹尾

画師乃別を制御児達　素々
清水のさかり多所月乃御　寒泉
も殊に実掛ふ十分乃秋　胡文
田舎への暦今から良雲々　疎柳
芝はをんて形却人なし　寒考
床に咲茶ちいさくも加茶つゝ　去遑
近くて逢ぬ恋は遠きれ　文坡
いや風爰たうて獏は閑かふ　梅四
こゝ所ひもちきとひの来るへる　専佐

照とても降とても名を三笠山　嶋仙
萑たらく何に添ふ数　等柯
勝頁ハ入れ碁盤の有ゆ也　呈考
食焼事を学問乃用　能移
海乃事以雲とこくと多なきて　士龍
鏡乃間とて無も見る間ゆ　桐圭
よし思ひ古山鳥乃歌二ツ　寒秀
ゆふの試楽を人抜かさる　風吹
生て居る鯉乃庵丁同さ毎ま　帰尊

水仙春ハ咲れ出し　史幸
尼寺に深糸干て行れ之　寒仙
淀乃流の春へ有ときは　鶴羽
碑さく夜の杯の裏風を分る　年化
夜に入りたハ誰か物を　梅流
散りてふ餅の茶初ら手際物　師龍
案種日新ふ成て候　兼貫
結仕ある間を鶯の祝きて　寒桃
系呉ふを載ル杉の六木　良騅

里夕
龍陽
羅仗
集山
志芸
升尾
素て
寒泉
胡文

疎柳
寒考
去違
文坡
梅四
專佐
鳴仙
等祠
呈芳

国立国会図書館　タイトル『花鳥巻』 請求記号 863-101
ガラス使用

花と成鶴なれ百壽書を出　桐圭
酒に濡ぬく紙の蝶に　執筆

丹頂堂の翁ことし七十の賀延を更衣の日記きのふと吟一句の祝詞を述録をもて笑に六ゝを次ぐことなく

讃州高松　無時菴　亜柳

手心に子代乃志まりや初扇子
ひふ青簾色をへる　松　寒仙
川幡に奥ある山乃歌れて　其柳

矢立乃水を旅れ答し　林鴉
おんのりと月に移り白へ菊をさけ　魯山
まらくと降　国栗れ雨　湖柳
湯ゆりに讃れて吹秋乃風　老蛇
歌口やきて志おらしき笛　雪軒
思路の雪ハ廣き思ふ袖　九花
神乃返事乃美を鶴ふ　絳水
御悟氣を教て鳥ハはいとまつ　巴陵
あら破乃浪くるゝ小鼓　秀友

節稽り勤こ雲のやま玉峯　李冠
經緒を志る近道の道　志計
取立て崩すをもちやしたゝい先　羽扇
寐るを伊へ寐をしるゝ　如勇
月芝をくり迅しくる車井戸　冬阿
詩作を覚日短の春　鬼拉
鸞鳥ハ吁詐を彈のを可笑なり　白陽
尻目ぎひよも伊る陽炎　朱交
冥鳴爲紙一重みな紙川　杉節

理のさゝか重へまて数　一洞
とり遠痴氣治るかり金り　柳糸
薫り るると津くく嚔　絲玩
縮緬の浴を縫り水馴棹　花友
きんきと延て巣のちき松　鳩艸
村雨の詠うら月秋まら玉新　緑支
秋乃きりて越画く光珠　一巴
神沙に幾度浸きる恵に詠を　翠羽
廓くを流る色鳥　亀鏡

樂祐　土產をたらむ　梅笠　梅守
分別らし九兀し遠山　直人
何和うらを稲荷と見たる諸栖教　魯山
歌為よりまれしまふ人形　林鴉
花の客を流まく料理屑　亜柳
艸芳しく拾ふ比比鶴　其柳

七十賀表　讃州高松　玉泉山人

松の杖根を卸てや茶卯木　鬼白
南と改むる手世の乖の子　兔海
鬣簗を細ふ出祐ハ日和にて　洗凡
級とも見ば路をてんもく　斗觴
出しを合風雅を合てあらぬ旅　佳實
家福やうに蔵りまる樞　鸞岡
上塗の定木外ちやいなや月　鯉山
三和大に却らさ却の春　菊暉

同

生り花也さし水百姓鯱垣　浪山年　葫芦庵浮風

鶴乃搖搖のかゝ鞍虫干　潤二

そよくと細引の歌誘ひ来て　丁々

笠を魚生に賞き砂原　支洞

能程に菓姫き隠れ松も有　呉舩

煙艸の味好嚢に和らく　波女

懐さ反故の溜る月乃支　洞花

廉安祈る耳のうれしき　目浦

三ツ物

七十年来先生の風悲哀る人幾許ぞ也
猶長寄して徒を四海に行くしと
因列若楼宿

うれからを蒐り廣うれ三千代艸　風子

見る程のを好春姫うき栄　尓袖

ぬらのさゝ舞蝶ともにたれしとて　五出

其二

自心に従ふて矩さ
叶ひのふさしめ伐　鋪茵堂

氣を侵にたゞくぬ松や千世の芸　五出

拾ひ虫ヲ引しらせ蘇　鶴　風子

新稼も水よく陽に和合して　尒袖

其三

壽の張四方に夏有て
賀莚に踏て　西谷氏

杵の音の千里に響く霧の那　尒袖

言く茲照ること如きの式　五出

園に蒙ル雪も蛙をかれ詠て　風子

三ツ物

日も月も拾ひ寄也　福本閑林舎

梅の窓　負舟

六種乃惠に喜り　調　梅雫

浦くを廣し霧の吹晴て　浯石

劉晨阮肇ハ桃を食ひて七世の孫に
逢ひ彭祖ハ菊の家にめてて七百歳を
始しとや今丹頂老師ハ風雅に
拾んて古来稀なりの人数に加ハ如
られて仙術を志しけるへとも須臾
十道を離るさるのいさしき楽
七百歳の下に立へりけれ程茂茲秋の
新しきをかさしきん事を
祝して　北條高瀬氏

松柏の歳に似る若葉の事　帰厚

袷を時にあへ里雨に乱　笑種

江乃鶴に心を延る窓ありて　千和
さくさむ杖ハ何地へりとも　三友
振ひを洛かへとる月乃菅　所厚
世菊の雫汲をめつらし　口之
夜々鳴ぬ麻に鯨乃夢寒き　夏流
乳母ら里へも取る袖の香　管覗
緑積る糸を力に祈る神　風艸
夕日ハ橋を越せ一時　不怠
主命に又も見ぬ鏡山　雪危

頭に刺し雪久しかり　夏木
月のきめ立たる亭と冷れ　変笛
鳴り来て龍氏名畫んとて　連麻
輪に麻とる牛の姿も秋深く　千鳥
杣に繋門の志きし祖宗堂　一逸
底の有賀仲男芸に碎　友詮
ちひろのりきのさまに若荷　執筆

うの芸月朔丹頂堂にして翁の古稀
健なりをよろこひ給ひ宴し志ろ海に
稲妙きらくらを雲裡亭に招てその
巻にとふ

十二

鈴石津雲裡亭 鳳吹

卯乃茶ハ照り合ふ世也 鶴の彩

杖に輕ゝれ綿ぬきの袖 寒仙

古禮程の識と歌にハ明徹て 志芸

四阿登はゝり裏表なし 等柯

月の出るまで踊事も恐し居 等明

秋をさぐらハ先ゑき酒 等雨

簑虫の聲ハ和手を待たし 仙月

不二乃美又てきめす紙を 芳洲

玄庵も聞し志ゑる程力はき 菓席

又ゑと餘る雪乃うへ雪 松霞

梅よりも左し九立て二たしら 等柯

國いゝ川ゑ夕ゝ菅乃舩 鳳吹

ゆゑ迄ハ相識にまゝて夜乃月 谷翠

涼臺うら家に菓を持 憐風

香組ハ二地らに笑て志つまりぬ 等雨

枝にはゝ次て蕗乃蓋うる 和融

茶ゑて六田乃氷消りてに 芳洲

歸鴈の行にさうらハぬ 志芸

十三

材木をこかし多人を殺れ　松霞
鋤鍬さ詔の爛るさゝれと　仙月
そふ書んかる時雨を鶴ふさらハ　文飾
咲ていよ〳〵冬冨貴艸　等明
粥煮て三世乃佛に奉る　鳳吹
風ハ志しさる山乃懐　芳洲
升楼の署也何とも叩て　志芸
底覚ひり霧の波つら　谷翠
片道ハ雪月排事葉堀　憐風

馬追封しと名み衣なり　等柯
思ふを筆乃命毛屋ふ　和融
志蕾ヶ原乃雨や辻占　松霞
廣安世の花とを卵(タヨ)に生とへらき　等明
時計狂ふて時乃知鳴　憐風
此あたり伊勢の登浦の芳ふり　谷翠
日和てらく乾くこゝろら　菓席
花乃竈ヲ北も丑りヲ使り天　仙月
松ハ亀甲と我春乃気　執筆

国立国会図書館　タイトル『花鳥巻』　請求記号 863-101　ガラス使用

花鳥以後御代の事と詠ひ
ぬつりなれハ四季折ふの芸を
配影して切のくその書を次
とふなりぬ

春

文臺に年をとる日や松の芸　幽花
戯れ人乃規矩とや かさし艸　班瓜
朝夕乃歩春若しかなよ鳥　呂洌

夏

鏡に老の桟嬢や隙見艸　寒徴
橘や仮名にも遊て名ハ武代　貫秀
友ゆや叩く水鶏も心俗　寒色

秋

代々に見て文字を利あり鶯菅　桐雀
菊咲や客も百度小さ川貢　秀艸
苅稲の手世詠ふ場や鳴鶉　百枝

冬

水仙や老乃心結くへもの　不磷
日時計の鏡や手度冬至梅　袴仙
盃に師老室ハなし鶴の宿　孤松亭　寒秀

姫府丹頂堂乃翁七十賀莫の宴き
のかよし但陰孤松亭の二夫人断糸
由ありてその奏城

東武

風薫ルまし鯉や加の尾上より　宇洪
七十の耳をお夫やかくなす　日　琴江
地りしらに老の歌少田植の角　日　山鬼
鋸やの風宿ハ百段文衣　日　梅子
ゝ孫茶や眉毛の霜を目にさらす　日　素交
寒翁年賀し申出志らせ
此度かくおかりし猶かくも

十五

[illegible]
[illegible]
集のもやしを[illegible]
素交

寒秀丈

四節

東武

年ふる雲高に行り山ばくら　秋仙
土踏ぬ育立に高し郭公　日　門瑟
名月や仙乃見ゆる折不　日　冬渉
雪乃日や枝をたるれて躍の鼓　日　巻阿

十六

夏季

起まれをもて答へるや　時鳥　東武　才舞

初ゝ巻に針をも付す蚊を分　日　其鶴

掃まきて一輪をえる牡丹分　日　素徳

片くハ田へり水や　杜若　日　熊耳

うれ茶也笠にハ砂の積る程　日　呑響

海底に富士をえる日也　初鯉　奥州塙　一之

蝶の森る懐に廣き牡丹の事　佐州相川　鯉赤

黄水に夜を知る日也　初鯉　駿州嶋田駅　竹曙

春夏前後随到来

もみらしく秋男ひらりや　茶の交　洛陽　風雲斎　風状

菜稀の伊達のたし欠也　更衣　百車堂　巴洲

茶艸与今も稀るむかし種　葩象坊　紙隣

りふうしハ紙子も脱て茶葉分　五七房　鳥文

其粗の伊達も種よし更衣　白扇

目ハ鶴に遊ひあますや　時鳥　百長

代くに茂る葉子高砂の翁艸　里有

松に遊ふ鶴もさしや白重　松雀

相生乃松ハ七枝也　八重雨也　后九十九菴　文下
七姫しの節ゑく表也子世の節　はくし房　江機
まうし於菴に仙陸をくきしためしを聞へハ七十有某稀なりとハ誰いひしあらゝ言ふ也あらんと
たり内の姫語る丹波主人のまゝ祝しおくる
菊子芽出る也しや彰祖ハ十分一　三居菴　飛良
七夕字ハ渦し尋きぬさくらゐ　花盛坊　勇枝
七十字也十七夕字ハ祝ふ春　飛之
松の花待也老後の伊達しめ　少年　三虎

健にしていまゝ君にと
史へし　巌上のおさを
撰してかの義の七句をとらく
冥土をあり玉乃杖ちと萬葉山　毎日菴　貫古
七十字の末摘花也　貴重賞　従古
増補　さん蔵の日記の深見艸　澤翁
うらくといふまゝ生の美葉ハ　其梅
家子代也無事と思おろ苔の茶　豊瓜
七重八重咲ことゝ姫きも百合の茶　新甫
美布のあやうまゝの也道の一節　莫皮

国立国会図書館　タイトル『花鳥巻』　請求記号 863-101　ガラス使用

八重垣へうの茶衣の一重紙香　撰峨
當代の間数に配る齢の那　夕静
綿ぬいて二葉や老乃用意艸　和州　古山
矩こへ[illegible]乃坂の凍ゝ　浪花　蛙文

賀翁七十齢　越州高田寺沢氏

七種ハ子世のもしめ乃白[illegible]　玉珧
松の種ハ家ふと配ましまもの風　原田氏　鬼柳
心の欲する所にしたがへども
ふ易のまりにハ月をのとし　六花斎
花に実ハ云葉ハ歳代ゆきかし　深川

寒仙詞宗の古稀の賀相のく
七の字を祝して

七州を百国とあふて松乃茶　越中富山　麻父
来て超ふ七十の賀や升ならん　杜若
猩々も七人出来る茶見の南　可聴
七郷に見あくる茶の一木かな　桃舎
松升を七ツ道具や老乃花　壷月
花当の美さや神の福七ツ　百洲
休さへ鶴の七日や升の秋　有来

賀七十齢

暖の年や美所好るとし　浪華　丁々
日花の便ともなる藜　西那　葫芦菴連中　洞二
楠や餘乃美菓にをじやかれ　洞花
美くし早苗に青玉鷹の新　呉舩
胡照や圓かさせを福祿寿　月浦
八十鴻を隣歩けや百子鳥　支洞
美作や扇を杖とまゝ雁し　久女
十徳の鞆(タ)容(テ)や百寿の紋生絹　波女

十九

たり由なる寒仙翁の古稀を祝して　伊勢津
よき友や高砂の松を月花を　二日坊　宗雨
鉢かきのたのしを有也　種樹　坐秋
十八の名に美菓也　松竹茶　菱波
茶也をあけする年や桃畠　変裏
としよりに龍とハ見ぬ柳に　槿馬
稀にする茶也杖にいて松竹友　執中菴　兎夕
たのしきを松也共の美みとり　美濃　芳裡
春七瀬めぐりてぬる玉泉の南　肥後　麻介

二十

紫ほとゝぎ折しも菓の次女ゝ南　讃州川辺村　雪丸
名物や老の志ゝ母乃　夏衣　日五色棟　冬阿
老乃名ハあらし紫子世若緑　日丸亀光風奇　金牛
蓋の饗宴ハなし人の餅搗ゝの
それハと翁の饗を祝しかゝしほ風雅の
新氏の樂しならん
うの花の雪も折よし　かみ餅　一中舎　丹危
翁のさきちの饗延ひらきなふよし
消息ありよりて俚吟を呈上ほと云
玉乃春　枝をみと紫の中し抱　藝州廣島　風律
以はまてを美きを次ゝも　樓ゝ南　以文

なゝなりふ云ゝき新澤や　松乃海　壺天
二月仙それも手作や　饗新　莢　青雨
長羽織年を包まや　蓋見笠　八十歳　仙呂
名梅や小松のさゝ　青海波　梅北
山笑し　麦や　砂ゝ　松の宴　呂舟
鶯や　掘りこめさる　作の婦し　文眠
杖の鳩　おのしさする　神樓　昨飽菴　芦路
百年の苗代婦ゝて　門田な　梨花亭　昨礫

丹頂堂風翁古稀の賀筵におくりて志ゝ事に
深るあ明のちに祝詞をのふ

年の雪はなりて高し松の青　備中玉島　鳳竹
鶴の好の世也なりき日乃重餅　和友坊
咲好ては苦ゝにふる世を横の葉　日濱島　李吹
世に遊ぶ歳の寄しも百の茶　日連島　四明
仙にも数好雲あり生乃松　日　獨楽
策喜色筆と姿也花の主　日　思之
巌をありきたらむの爪花の宴　日　如柳
菊里志る仙乃喜也玉の杖　日　孤雲

准らへてその年ゆし松乃茶　日仙崎　五白
蝶を那に杖は家をり不老門　日倉浦大島氏　随二
老の杖はいて縁や曾祢乃雲　小野氏　露三
曾祢尾上せんへ梅の白ひ小　可参
七十も理し杖好る柳腰　寛元
花鳥のあるしを知也七十賀　呂竹
とふきや猶百とせの喜待ん　さの女
矩こさと行氣色なし喜の水　但列羅合園　飄馬
稀人の杖也秋志る升の色　日竹田探柳菴　寸玉

老鶴也七十年の春末取し　可楽
美州の壁也　縮緬の垂頭巾　曲玉
雲霧空　杖使く梅を交歡　遊牛
苔種の筆に積る也　老乃春　閑玉
名とき下の打結し也　世の苦茨　寸梁
八重鳴る身に　咲そへら苦乃笑　探玉
滴りを桂雲也　菊乃七百代　梅玉
滴る也　彭祖の雲　壺すれ　嶺麥堂　知水
稀に合ふ白髮めて川也白重　治書林　寛治

稀に重川名もいるみ壁く錦る事　有馬山田氏　可楽
七そちの加ふ無妙もしなく筆の苦　防州徳山　扇路
梅分明波あつり也　國の津忘　洛陽　練石
望ぬるさハ短城も　城ん苦乃坂　日　湘南
稀也乃也しの儲也　美しと里　日　鐵夫
紅粉も也し問へと御免の着　勅　日　一石
（以もよきの風雨衣の日をもて古稀の笑を
詠ふ丹頂堂を共に祝して一章を送る）
う乃也の雪也手世姉る貢　浪華井上氏　婆束
海を結坂去へて白ふ也さくら艸　洛陽寸松堂　因石

国立国会図書館　タイトル『花鳥巻』　請求記号 863-101　ガラス使用

播州吉廣

志ら鶴もはふ也第世の志ら雪ぎ祢　五葉翁　春臺

月に寐て　茶の壺也　明　七ツ　堀内氏　洞花

老妙なる　咲日ハ若し　桐の茶　的形　岡田氏　李水

桐笑翁とし健而七十歳にまらせ
ぬふ門人を姫女諷ふ連なるよ此迄
にあいて十回の見る所とハこれ
こゝ結をり

世に廣ふ形也　茶て　樓の実　日　井上氏　梅笑

雲ゝとハ老乃かなり　古稀の春　廣峯山　福原氏　古硯

待ひとり　心のまゝに　茶の去　増位山僧　白宇

毛衣も　かえん　此日也　桜の鶴　法花山僧　畫虎

雲書しはふより　堅き　樓の実　飾西　畠松亭　胡文

玉子　枝ほく　風俗居し　美みとり　カンキ　和文

桜のまゝに　十かえり　来ませ　美緑　中西　桐井

三子　歳の桜也　茶実も　掌　觜崎石井氏　時習

八子　世咲　花に来て　啼ケ　百子鳥　日　硯壽

時はふ也　朝日　涼しき　鶴の新　日　梅亭

厚ま　好　ゆまのきや　衣　劍坂不能斎　何執

風流を　出ひて　桜乃信すし　林田　桐風

幾巻も松乃連若也 茂乃芸 日 志柳
今日のうちを手と紙八手に衣 乃井野柴之亭 連端
世の徳の鏡時也 四方に誇る花 タツノ 林夏
幣も香を老を塞の様 可子 日 品水
古来稀 芸に言れてもとる杖 日 渚柳
君の賀に咲て名もよし 仙翁花 ヒカイ 友之
鶴の羽に掛てそうけ也 美みとり 宍粟和津美氏 扇風
稀しの表に実もあり 芸も有 絅干眺松亭 呈考
梅乃春いろけ 幸て又 以ろけ 手野大塩氏 一翠

う新花也 手と紙をうとふ扇の手 御着 里夕
世に高き古木の松也 立木立 日 友吟
四方へ振ル 雲に手と紙也 苔新花 日 湖舟
国に杖 冥路也 出川新芸 北条 笑種
其跡松に並ぶ也 手代乃 春 日 千鳥
ふこうらの齢の数也 青蘆 日 友詮
芸の道七渋越て也 未遠き 日 連麻
綿好きも 稀あらふ 西に杖 日 管覗
郷越て杖の力也 芸乃人 日 夏木

年を強て玉乃誉也松の茶 日 雪危
花の香を聞るあらしや十出 日 夏流
おのつから規矩を割て也茶心 日 口之
七出やすく誠こそ也まなまろ 日 所厚
又廣井杖也月茶出り好 日 彳和
万歳の春也鼈 古加佐祢 小谷 等哉
生姿乃ゝ字也玉乃茶日和 日 変笛
次也玉子生杖升の美こそ 日 三友
年こそ肥て涼しや古稀の人 日 一逸

壽也世をゆるされし茶の杖 冒気 高見氏 琴風
月茶を杜子美ハ何とうしや也 日 黄裳
三千代艸壽厚し七重咲 犬飼 梅夕
七十の袂深る也萬世月 山下僧 志計
七重ハ亀かさなる梅の匂ひ 家島 先志
亀甲のこへ也松子菩提茶 田井 花谷
風子来て問ふ也梅のあり不 姻子 雲虹亭 為龍
七十乃春也古乃てから山 西構 菅野氏 梅韻
七十里おのけて花ろ子世の旅 今市 杉山氏 似硯

七十にして猶三嫁也子代乃春　河内村　其風
其の人色鶴色するや　芝明　山ツヤ　松吟
すれの雲しし八重九重也　咲さくら　日　梅吟
枝ハ何重て照す　ちくらの風　片シヽ　長江
老松に子世吹東風也　世に丈へ　正条　吟山
七曲越て色はよし　萬見杖　日　隣川
七福の教乃訓とりや　更衣　シカヽ鳥雲堂　仙月
三歌の八色を見えを　萬の雲　日　等明
年のまゝを咲と花王乃枝ハ御り　日　鳳蕉軒　志芸

子世せられ　芝乃花卿　青簾　日　等柯
稀に見　時を見えて也　雲の芝　日　憐風
七福の外に笑あり　忘ひす　艸　日　芳洲
橘也　頂キ　あらき　鶴乃　幅　日　菓席
文臺のもとや　扇乃富士　日　松霞
七車すゝて也　松乃若みとり　日　和融
萬に花　千ゝる　松乃みとり　日　可遊
齡を見　造次顛沛　もとも　子　曽根猿笑斎　巻而
世に廣く　兼ふ也　松の若　緑　アリノ　繁水

国立国会図書館　タイトル『花鳥巻』　請求記号 863-101　ガラス使用

花のうへ千世ゑんものう歌とこ所 日 蘭子
云新菓子のふるや古ゑ松新花 日 鶯水
書寄り雪とも甚乃梅新花 一乗山 日 一孝
突杖子千世可齢や玉乃春 福本雪扉菴 浩石
是こゝらも海に策子世や松の茶 日 負舟
貸久り是ぬ老木の芽立ぬ 日 素求
松涼し世やめてゝさ新鶴の顔 日 自閑堂 梅雫

七十の寿を却つへのふを
寄松竹て競し付る

此君の茂る齢や生津可茶 赤穂長安氏 巴石
折餘る楢や彭祖ゟ夏衣 アホシ 水焉
拯ふとよ七の外を作乃秋 室津 苕洲

七十翁隠士を見たゝや の志ハ青陽の
寿にあらハきりき健さ実見なふ
との安を賀して

されたこ桃枝ハ伊達之玉の茶 赤穂醉仙堂 寒桃

周成王乃孝叔虞桐葉の
詩哉作りなふ事あり是可
なるらふて一句を作し
桐葉翁
乃七十神度を賀す

桐の葉先すへ策久しき家木立　長短舎　主圓

花王の家貴なるも
猶意公羽の盛なるにかよへ寸

牡丹より稀なる年乃家貴分　鳳蝶子

美升の杖に子世あり老乃伊達　剪葉亭　桐圭

末乃子代老木にきたふ美葉分　松下亭　笠露

永り色や策子世義ル今年升　柳流亭　和秀

う新葉も子代とや明乃ふ重　春色亭　東義

美升に猶繁りを事子世乃杖　成趣苑　一艸

二月に仙を献をしハ庵主
豊乃代とも

稀なる色や卯月もまゝ紀仙乃芸　後藤氏　百聲

鍊ぬるも凋まぬ花也古來稀　習々軒　もゝ地

稀乃ぬるし稀ゝ名場也松乃花　木暮氏　芳文

此道行新久しこの年し夜木立　武川氏　文坡

徳を香も世へ隠なし梅の花　石井氏　不休

相笑の翁をし七そちの齢をかさね
耳さとく目明らかにて八葉とかに倦す
足ハ杖の助をうけ茶香却つから禄に
別て月雪常にそてりこれを謝に古
稀なりとてへし

筆に子代乃字のすがた国乃花　空洞舎　師龍

夜に更衣の一日壽の宴をもふ風客を
集て悦をはいつるとなん而も千歳につら
なりて却ひかれも却ひより侍に

鶴に象仙のまもれ也　神拾　仝

相笑先生めてたき少しの記ひめぬにハ
卯月一日而も却ひから好齢を壽会て

筆も七重祝りて千世の節　旭松亭　史幸

七仙乃ひに生子入り衣りへ　生田氏　羅仗

秡洗に衣も取り川　七彫川　真嶋氏　嶋仙

井に移る影いさ玉も桐の花　三木氏　年化
水莖に流しさ越り来し花子成　桐陽舎　魚貫
月雪と積ても美し松乃花　春柳子　左隣
丹頂堂の翁七十にして壮年のごとく成をすて貢稀と営すべきれ
杖入す竜まちや西乃花抱ひ　鶴羽
翁乃巣具にとり付て祝す
流しさを稀に出る日や冥士見笠　素々
老の手望くを子世まて冬年升　寒泉
伊達に使ふ杖見えてよも　去遑

七種のうへを算んとすれば　艸　疎柳
いきをひに子世乃香ありや菊の苗　寒考
七十やけふを春衣のたつ袷　蓮花巌　聲可
老を好や花又子世を西に杖　専佐
七曜の照や卯月も子代の花　艮騅
満るを三所美し春の澤　梅四
七分を粧ひ使よし花胡　玉山
熟色美し手拍乃角力艸　未龍
夏菊乃あるしや里乃年も老　柳波

月雪にかゝる手趣ひや　文衣　冬仙
風薫る松やすゝ水のくらへ物　鷺峰
枝持て乳　熟々茶もとり　生之
ふのうへ子世を練るや二葉艸　桐岢
高砂乃松や一しほ窮の年　志桃
茶幾重雲なもひより趣ふ鶴　不笑
枝伸いて茶喫松や二夏のたれ　和風
まゝ葉重くらへ物のかゝ手作　猿山
七種乃あまり蒼のひより雨　竹尾

花鳥の戒乃葉是によをて
七旬祈賀をうとふ

三十四十与冨士に大井を花心　非々菴　十磨

俳諧藝にあらす大道なりと門人を示し
世に嗚ぬふ丹頂風翁にしき稀の手に
めくるに門人或ハちるゝある人々遠ま
近き壽のこの葉これをえて共にこれを
よ語こひて

子代涼し　輝る茶鳥藻汐艸　芳馨舎　梅流

きくの色菊之有は湛乃芳ばせまてをと
矍鑠たる丈翁ハ択りの徒にならす
○
長き日も色ぬ仕掛やれの漏
騰雲堂
士龍

丹頂の翁あより風流に家する春秋万歳
とし七十にして杖の技をかかす
これや地上の仙ともいはん此道の古統
人々千歳の壽をすゝむ事千載
老も芳宗雅乃躍すと云

鶴の頸七尺高し澤乃芹
不滞園
能移

俳諧もまた一ふさまかきてまくらと
かまへしそふやわかすれの齢を娯
しみにかへの作まり人々の口ずさみ
めでし詩歌さへ志乃せちある
稿をも知ては此一帖のくちと書
かへて西のひとりの思ひをもんと
おもへりなりしされを次席の
まくらあるは松亭より前後
にまかすりもの翁のまくら
るみゆへきへしと云
寒帆

賀七十齢前書畧

なしてうちにこうちを添てナゝりの
たゞ咲松乃葉をやえん　誠意

丹頂堂のなゝうちの袈に
鶴袈齢といふこゝ物を

老乃波こちハよ来れとつの乃浦に　洛陽
かまらはなるゝ千世の友鶴　長松亭

お形しんを

くり返し千世にやちよと友鶴乃
夢をゆたかにちきりそくらん　百枝

お形しんを

池乃面に封建ぬて袈るあしの
よハひハ千と千万代也飽ん　藏女

おなしんを

友おほみ封建ぬる田鶴の千世
ちなる齢ハ数も好きらし　宮城氏　幸女

おなしんを

封建て寸金汀の田鶴に袈りをきて
千世をしはきをぬよそひ色ぬ　尼　壽心

おなしんを

行末乃たるけきなるをしらはるに　　瞽女
ちきるよそひハ千世也筑ちよ　　初瀬

おなしゝ心を

いにしへも両道那る妻を重ねきて　　豊岡大石代
ちきる千年の鶴の毛衣　　繁道

前書畧

筑子と柴ちきりをうきて　　変鴻の
うら色になるし　友つる乃友　　赤穂
　　直好

前書略

まれなりし人のよいひのてしより　　美濃沙門
老もまうへて　筑妻也徳ん　　芦伴

花慰老

老を紛しなくさむ　ためのさくらを
うへて　筑世の妻も　繁らん　　昌軌

おなしゝ心を

筑子世の妻をとへるんさく　茶乃
あのぬ色秀に老を忘れて　　嘉連

おなしゝ心を

祐齋

前書略

受閑

前書略

道晧

人の家に少しみをしてふきぬふ
なるまゝにもハ屋ぬ一きに成
をしめれしあきハ千世ハ千
の名によそへはしとある歌

維脩

色海さる極りあらめ友來てハ
升ゐも見する千世のひとしほ

寄賀桐笑翁米寿

七老談歌壽宴開。高樓置酒醉仙萊。王喬不羨金
莖露。別見滄洲神女来

壽寒仇老人七十

釋梵龍

丹頂之堂丹頂鳴。忽看欝勃瑞気生。南山松竹無
疆色。東海烟霞何限情。白雪尊前詞客集。青天屋
上壽星明。蓬萊金母來應說。供養仙籍早先知姓名

賀井上雅丈七旬

明石景文

従心千壽春。萬戸憶交親。歌舞丹頂袖。由来古稀
人

奉賀寒仇翁七十

三木庸盈

仙桃花下錦筵開。無限春光映壽杯。遥日長留雲
五色。翩然君自在蓬萊

壽井上翁二首

来原曲靖

結子碧桃樹。天々映地仙。王家偷去後。已是三千
年 其一

池畔千載松。丹鶴遊其上。藥爐長生訣。靜處獨自
養。 其二

国立国会図書館　タイトル『花鳥巻』 請求記号 863-101　　ガラス使用

賀寒仏居士七十初度　釋義洞

一泒興隆性時貞。古稀七十盛家名。祖恩新報月明句。画上老翁如有聲

壽寒仏翁七十初度　三輪成之

朱楼四月綵雲浮。七十披裘思楚丘。瑤笛興闌吹鶴曲。綺筵歌湧錯觥籌。壽星朝掛姬城外。滑稽久傳華表頭。青鳥徜徉捧盤至。蟠桃花實幾春秋

丹頂堂主翁七十賀詞　艸加親賢

藐兮二尊。巡右巡左。于柱于橋。賡詠以和。素戔新蛇。率氷川滸。爰及稻妃。聿來昏宇。廼于為宮。百堵馮〻。為宮為室。厥墻八重。詞花之栄。仏佚修因。天生夫聖。柳本其人。七朝之美。及醍醐皇。五臣有撰。觀国之光。景行之子。仲哀之父。振〻公姓。曰日本武。東征日夜。越筑波山。燭人之侍。唱以相燕。聯詠之祖。阜二千年。于賦于騷。郁〻闃〻。彼唱此酬。以好以嗜。滑稽之流。大任是誰。伊人桃青。芭蕉生階。祖述国風。憲章俳諧。斯道之興。共語驚人。有李有棠。門庭諄〻。科條金玉。衣鉢有次。惟然之統。千山

之嗣。此翁有焉。丹頂之堂。古稀瞿鑠。為壽為康。賀之賀之。金尊兕觥。其酒其肴。既旨既嘉。賓主湛樂。以舞以歌。松柏之茂。南山之高。維名維馨。維德維操。姑射之仙。無何之鄉。在播在姬。有朋遠方

賀寒瓜老人七十　生田尚磨

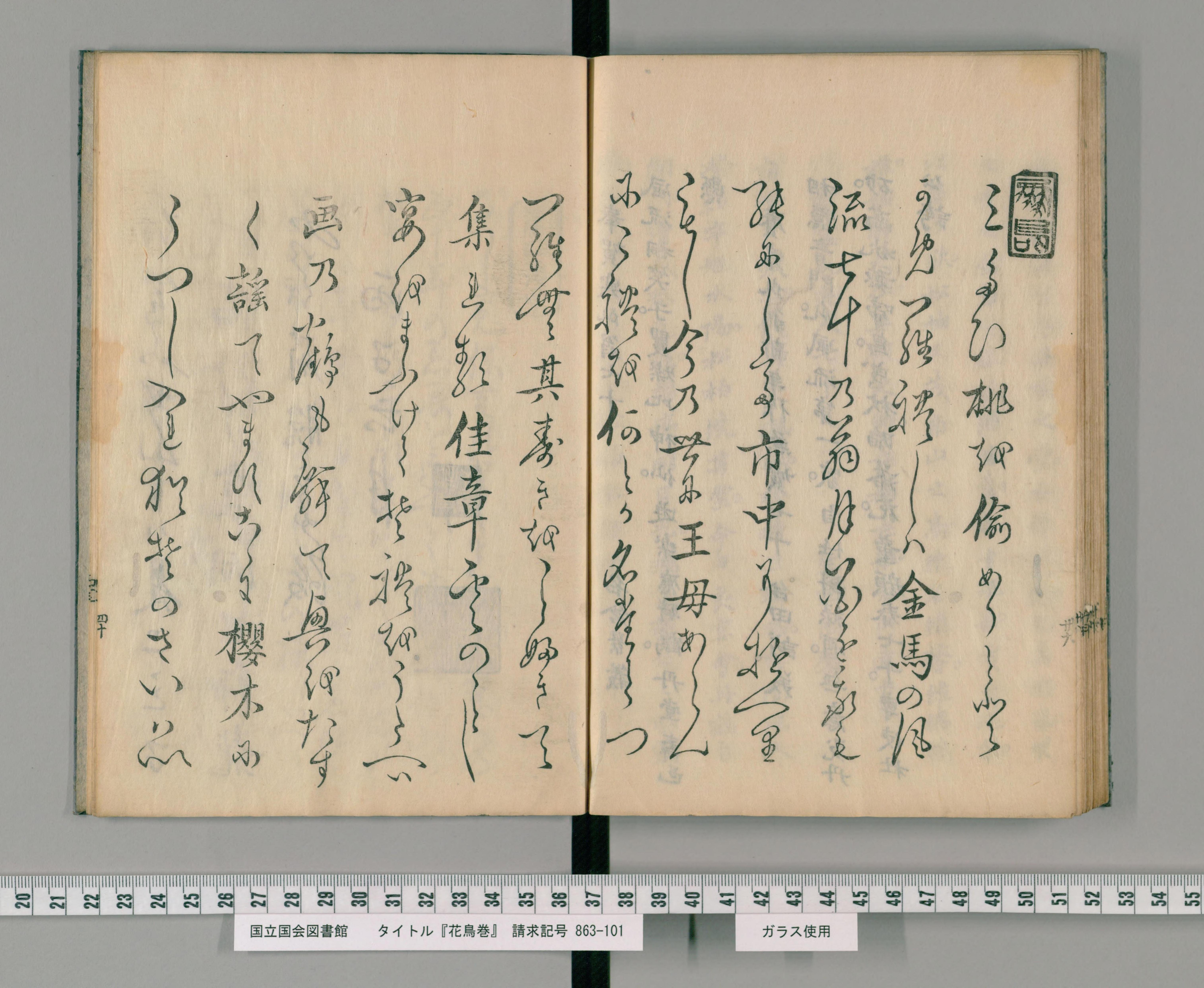
南海多美玉。故人足珮玦。璆璘且璘瑞。腰間照人潔。結宇姬水陽。松柏繞其堂。今日良宴會。丹鶴自翱翔。清風春色溫。詞場明月光。瑞氣鬱葱〻。紫霞滿壽觴。丹鶴長不去。松柏亦無疆

奉賀寒瓜翁七十　名倉景義

風流桐笑子。矍爍比神仙。遊樂應騎鶴。丹堂壽邑懸

賡寒瓜翁新年作兼賀七十　合田誠美

相憶青門瓜。風流第一家。自任斟綠酒。無意覓丹砂。高枕聽啼鳥。曳杖蹈落花。童顏春七十。專使杜公誇

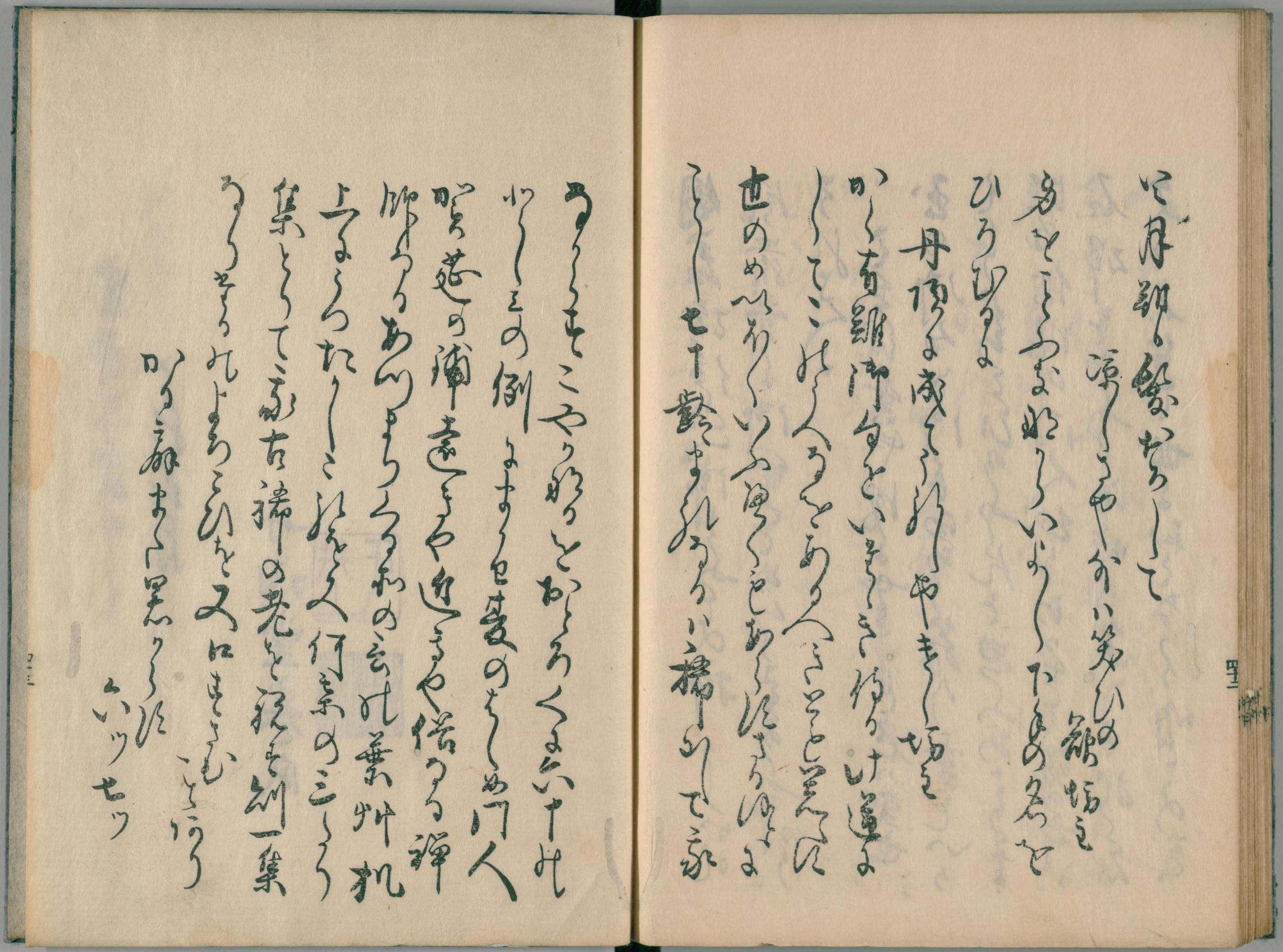


三ゝ木ひ桃ゝ倫めくとゝ
の光つ結ゝしハ金馬の風
流七十乃翁月ゝ雪を
結ゝしゝ市中ゝ雪
ゝしゝ今乃世ゝ王母あしん
ゝ結ゝ何とゝ名ゝつ

つ結ゝ其事ゝ結ゝ
集ゝ佳章のゝし
宴ゝまゝけゝ結ゝ
画乃嶺も解て真ゝ
く謡てやまひ櫻木ゝ
ゝつしゝ結ゝのさいゝ

国立国会図書館　タイトル『花鳥巻』　請求記号 863-101　ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『花鳥巻』　請求記号 863-101　　ガラス使用



863
101

14154

芭蕉翁并門人
俳諧書林

京二条寺町
井筒屋庄兵衛

国立国会図書館　タイトル『花鳥巻』　請求記号 863-101　　ガラス使用

国立国会図書館　　タイトル『花鳥巻』　請求記号 863-101

ガラス使用